

北設楽地方における仕事着に関する調査研究

—戦前～現代までの仕事着の補助衣について—

古川智恵子・豊田幸子

A Study on the Work Clothes in the Kitashitara District

The Subsidiary Work Clothes from the Prewar to the Present Age

C. FURUKAWA and S. TOYODA

緒 言

北設楽地方における男女の仕事着の変遷についてはすでに機関研究誌の“愛知県北設楽地方の生活文化”にて報告した。本報では仕事着の上に着用する補助衣に視点をおき、その構造と特長、着装方法、変遷などについての調査研究の報告を行なう。

方 法

1. 調査期間 昭和55年5月～58年3月
2. 調査地点

調査は稲武町の武節、御所貝津、富永、小田木、設楽町の東納庫、田峰、田口、桑平、和市、東栄町の中設楽、本郷、下粟代、津具村の行人原、見出、能知、原、豊根村の川宇連、下黒川、富山村の下栃、以上計19地点について実施した。

3. 調査の対象

調査は上記6カ町村の役場および郷土資料館をはじめそれぞれの地域の古老を訪問し、仕事着に関する事項について詳しく聞きとり調査を行なった。一方仕事着の実物写真撮影を行ない、関係文献等を収集し、これらを参考に考察した。本報では明治、大正、昭和の現代までを調査対象の期間とした。

結 果

1. 仕事着の補助衣の種類

表1は戦前～現代にかけて、仕事着の補助衣にどのようなものが着用されたのか聞きとり調査した結果を服種別、作業別にまとめた一覧である。種類別では外被類、手甲・脚絆類、はきもの類、かぶりもの類、たすき・前かけ類の5服種に分類されるが、男女の類別および町村別による差はみられなかった、以下これらの服種について詳細に述べる。

2. 補助衣の着衣形態の変遷

- (1) 外被類

- 1) 戦前の外被類

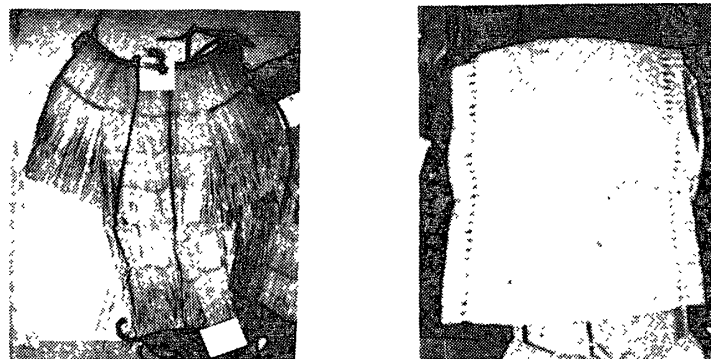
図1は戦前の外被類で、使用する素材によっておおみの、しゅろみの、けらみの、肩当て、きごぎ等の種類がみられる。みのはわが国古来から用いられた雨具であるが、その他防寒、防雪、日除具としても利用された。その発生は古く、奈良時代の文献に初見されるのが最古と

表1 仕事着の補助衣の種類

種類	年代 町村 性別	戦前		戦後～現代	
		全町		全町	
		男	女	男	女
外被類	水田畑作山林	おおみの、しゅろみの けらみの、そでみの よろいごさ、きごさ 肩当て、背中当て 雨合羽	おおみの、しゅろみの よろいごさ、きごさ いごさ、肩当てみの 背中当て	背中当て、ゴム合羽 ビニール合羽 ナイロン合羽	背中当て、ゴム合羽 ビニール合羽 ナイロン合羽
手脚甲絆	全作業	手甲、脚絆 ゲートル、うでぬき	手甲、はばき うでぬき	軍手、ゲートル ゴム手袋、はばき	手甲、うでぬき 軍手、ゴム手袋 はばき
はきもの	水田	わらぞうり	わらぞうり	水田用地下足袋 水田用長靴	水田用地下足袋 水田用長靴
	畑作山林	わらぞうり、わらじ 甲かけ、半甲かけ 津具足袋、地下足袋	わらぞうり、わらじ 甲かけ、地下足袋	地下足袋、運動靴 ゴム長靴	わらぞうり、地下足袋 運動靴、ゴム長靴
かぶりもの	全作業	手ぬぐい、菅笠 ひのき笠、ピーピー笠 丹波笠、まんじゅう笠 こっぱ笠、大笠 鳥打帽	手ぬぐい、菅笠 ひのき笠、ピーピー笠 かぶり笠、小笠 大笠	手ぬぐい、鳥打帽 作業帽、麦わら帽 登山帽	手ぬぐい、菅笠 麦わら帽 つばあり作業帽
たすき前かけ	全作業		たすき、前かけ		前かけ、かっぽう前 かけ、袖なしエプロン



(a) おおみの (b) しゅろみの (c) けらみの(芝みの)



(d) 肩当て (e) きごさ

図1 戦前の外被類

いわれる。¹⁾ みのには背みの、肩みの、胴みの、丸みの、みの帽子、腰みの等6種類のものがあるが、(a)のおおみのは胴みのの一種で両肩から背部および胴部をおおように作られたみのである。その形態は肩みのにさらに胴、腰を付加したもので、ほぼ二重廻しのような形態をし、肩からひもで左右の胴部上端をつり、これに両腕を通し、衿と胴につけたひもを結んで着装する。材料には広く稲わらが用いられるが、しゅろなどを用いた場合にはしゅろみと呼

ばれる。(b)のしゅろみのはわらみのに比べて大変軽く，水分をはじくが，わらは水分を含むと目方が重くなり，機能性にとぼしい。しかし，しゅろみのは材料が得がたいので高価であった。みのの材料には“みのぐさ”¹⁾と²⁾いって雨雪除けに適したものを選び，その土地の豊富な材料が用いられた。(c)のけらみのの材料は芝で作られて“芝みの”とも呼ばれるもので，わらに比べて大変軽いものである。“けらみの”の「けら」はみのの古名で，動物のおけらのことであり，

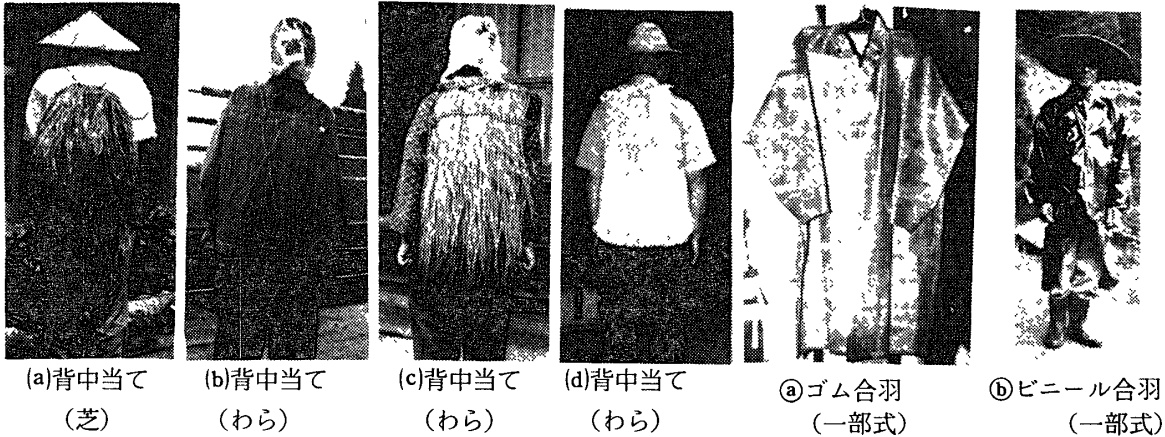


図2 外被類(防暑)戦前~現代まで

着装した姿からの名称²⁾のようである。みのはこのように古来から農村，漁村において長い伝統をもって伝えられ，用いられてきたが，16世紀に南蛮人の渡来と彼らの舶来文化の輸入によって合羽(capa)がもたらされ，日本化し普及したが，明治文明開化後は新らしい雨具の輸入により，笠とともに¹⁾都会はもとより農村，漁村からも衰退していったのである。(e)のきござは雨期の田植や日射のはげしい最中の草取りに男女とも着用する外套であり，主として藎草を材料として¹⁾奠座状に織り，紺木綿の布で左右を縁どりし，ひもをつけて着用する。着用の際は腰のあたりをたるませ，上体の屈身を自由にする。(e)のように縁どりのないものもあった。

図2は防暑のための背中当てである。またこれは物を運ぶ時のクッションとしても使用される。写真(a)~(d)はその着装であるが，(b)，(c)，(d)は稲わらで，(a)は芝で作られておりわら製のものに比較するとやはり軽いようである。以上のものは男女兼用で着用され，自家製で，それぞれの体型に合わせた寸法で製作される。この背中当ては現在でも中高年令者には今だに愛用されているものである。

2) 戦後~現代までの外被類

図3は戦後~現代までの外被類を示す。従来から使用されていたみのやきござは昭和20年代まで使用されたが，昭和27~28年頃からゴム合羽等も使用され始め，昭和30年ごろ



㉔ゴム合羽(二部式上衣)



㉕ゴム引布合羽(二部式上衣)



㉖ビニール合羽(二部式)

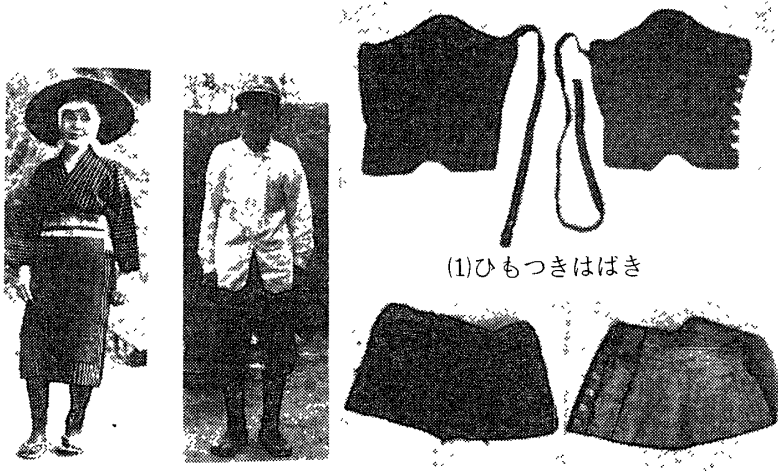


㉗ゴム引ナイロン布合羽(二部式)

図3 戦後~現代までの外被類

から軽い素材のビニール製品が作られ、まず一部形式のビニール合羽が出まわり、ついで36～37年頃から上着とズボンの機能的な形態のゴム合羽の二部形態へと移行し現在に至っている。(a)はゴム合羽の一部形式で丈は膝下のコート丈となっている。ゴム製でロング丈のものは非常に重く、むし暑いのが難点である。(b)は昭和30年頃から使用され始めたビニール合羽で、着丈はやはり膝下のコート丈である。ゴム製に比較すれば非常に軽くなったが、むし暑く、通気性に欠けていた。(c)はゴム合羽の上着である。(a)のロング丈に比較すれば半分のこの上着丈になれば、重量も少なく、通気性もよくなり、着脱の便もよく、開脚、屈身等の動作も容易な形態に改善されてきている。(d)はゴム引布の上着であり、(c)よりはやや重量、通気性の両面から

よくなってきている。(e)は女用の二部形式のビニール合羽であり、柄は紺地に白や赤のかすり模様となったものが多くみられる。(f)は最新式の二部形式のナイロン布に裏ゴム引きの合羽であるが、肩裏などの工夫もあり、かなり通気性がよくなってきていると考えられる。以上のように素材、形態ともかなり合理化されてきている。



(a)はばき(1)の着装 (b)はばき(2)の着装 (2) ギター入りはばき

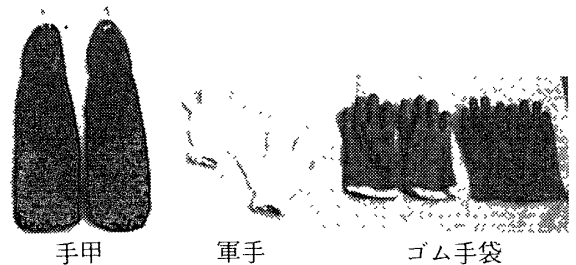
図4 はばき

(2) はばき (脚絆)



図5 ゲートルとその着装

うでぬきの着装 (男) うでぬきの着装 (女) 手袋の着装



手甲 軍手 ゴム手袋

図6 うでぬき・手甲・手袋類

戦前、戦後を通して特に山村作業等の厳しい仕事は男女ともはばきや脚絆を着装した。はばきは文献では養老の“衣服令”にみえるのが最も古く、脛(はぎ)に着けるものの総称であっ

たが、室町時代に脚絆という言葉があらわれてはばきは蒲やわらなど植物の茎、葉をもって編んで作られたものを云い、脚絆は一般に麻、木綿など布を材料としたものと区別された。¹⁾ 図4にはばきを示す。戦前のものは図4-(1)にみられるようにはばきの中央部にこはぜがつき、さらに上下にひもをつけてくる形式のものがみられたが、戦後既製品が出まわるようになり、布の間にガーターが入り、足にぴったりと密着させてこはぜでとめる形式のものが出てきている。又現在では主に男子が使用している。写真(a)は戦前における女のはばきの着装である。(b)は現代における男のガーター入りはばきの着装である。ズボンの裾につけ裾さばきをよくしていることはもちろんであるが、ズボンの裾のよごれやいたみがずいぶん少なくてすみ、機能的であり、経済面、衣服管理面にすぐれている。

図5はゲートルの着装である。ひざからズボンの裾にかけて巻いて着装するが、前項のはばきと同様の機能性をもつのみでなく、心理的にも仕事に対する態勢がととのい、足が軽く、疲労も少ない着装である。

(3) うでぬき、手甲、手袋類

図6の手甲、うでぬきは手首とうでをおおう服物で、屋外の労働に用いられる。これは室町時代に絹物で作られ、女性が用いたが、一般庶民の労働着として用いられたのは江戸末期ごろからであるといわれる。¹⁾ 古くはやはり上下にひもをつけ、くくりつける様式で袷仕立であったが、現在では上下にゴムを通して着装する。素材は黒色木綿のものが既製品として多く出回っており、単衣仕立に変化してきている。又現在では農作業には軍手やゴム手袋の類も多く販売され、作業能率を高めている。

(4) はきもの類

1) 戦前のはきもの

① 畑作・山林作業時

図7に畑作、山林用はきもの類を示す。戦前の畑作業には(a)のぞうり、山仕事には(b)のわらじであったが、その後甲かけたびなどが使用された。北設では明治の末厚底で2重にし、外付けにしてその重ね目に漆をぬった“津具足袋”が使用されていた。これは足袋以前のものである。日本では明治の末ゴム底の地下足袋が作られ一般に普及したが、北設地方での地下足袋の使用は昭和3～7年頃からといわれる。写真(c)は津具足袋から現在の地下足袋への過程で考案されたもので、底はゴム底を使用してはいるが、縫目が底に現われているために糸がすぐ切れてはがれやすく耐久力にとぼしかった。その後、底のゴムははりつけ式に改良した現在の地下足袋が考案された。



図7 畑作・山林用はきもの類 (戦前～現代)

写真(c)は津具足袋から現在の地下足袋への過程で考案されたもので、底はゴム底を使用してはいるが、縫目が底に現われているために糸がすぐ切れてはがれやすく耐久力にとぼしかった。その後、底のゴムははりつけ式に改良した現在の地下足袋が考案された。

② 水田作業時

戦前における水田作業時はすべてはだしで行

なわれた。

2) 戦後のはきもの

① 畑作・山林作業時

図7の(d), (e), (f), (g)に戦後の畑作, 山林時に使用したはきもの類を示す。戦中から終戦直後にかけては地下足袋等も配給制となり不足がちであったが, 戦後の農作業用のはきものとしてはゴムグツや種々の地下足袋の変形がみられる。現在では写真(d)のようにゴム引きの地下足袋で, 足指つきのものがほとんどであるが, (e)のように指なしのものもみられる。指なし

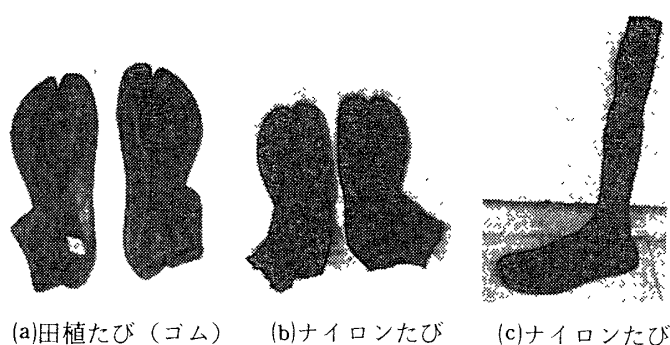


図8 水田用はきもの(戦後)

しものは関東地方で多く用いられ, 中部, 関西地方では指つきのものが多く使用されている。傾斜地の作業においては指つきのものの方が力が入り, 機能性が高く, 外まわりは指なしでも内側には指つきとなった構造のものも使用される。また(f)のようにはばきつきの12枚こはぜの地下足袋にもみられる。(g)は甲の部分がズックからゴムになって, こはぜつきの長靴との兼用の機能性のよい防水地下足袋になっている。

② 水田作業時

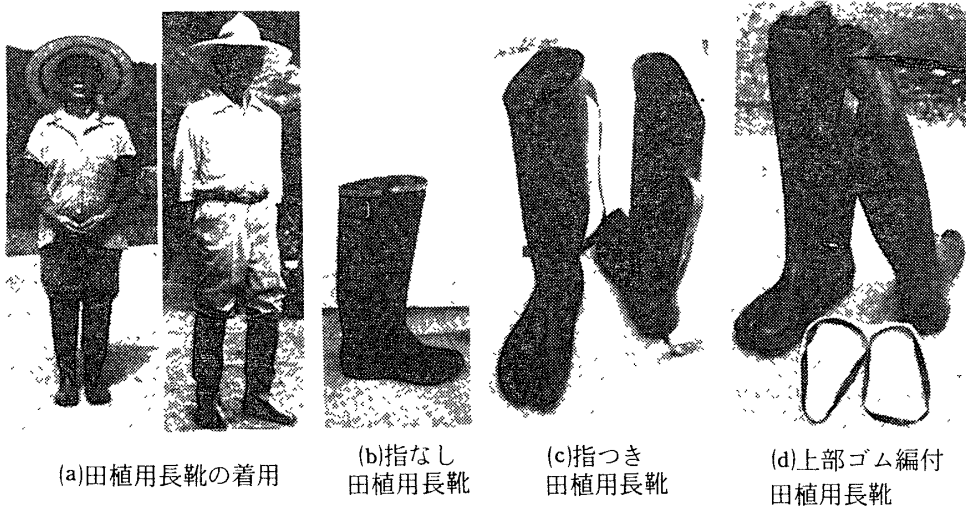


図9 水田用はきもの(戦後)

図8に水田用はきもの(足袋類)を示す。戦後は作業も機械化が徐々に進み, また保健衛生上からも足を保護する意味で, 図8—(a)の田植たびや(b)(c)のナイロンたび, 図9の長靴類を着用する。

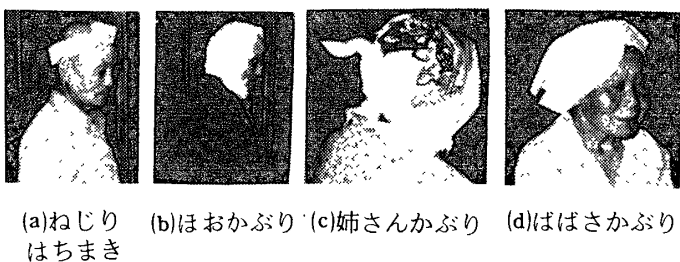


図10 手ぬぐいのかぶり方

図8—(a)はゴム引きの田植たびであり, (b), (c)は足首がナイロン糸のメリヤス編のゴム引きとなっており, 昭和32年頃から使用され始めたものである。図9—(c)は丈の長い指つき田植用長靴であり, 足首を固定するバンドがついている。これは昭和37年頃出始めている。

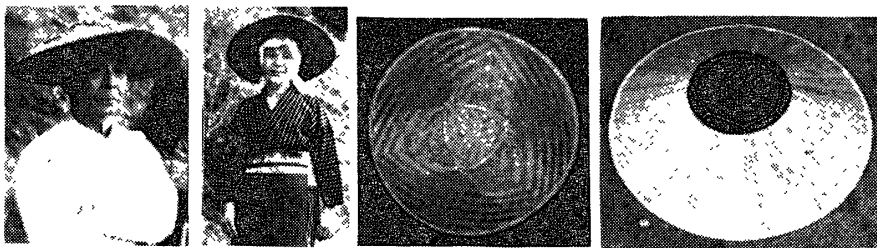
(d)は(c)の後に作られた水田用長靴であり、長靴の上部にゴム編がつき水が入らないようになり、上部および足首はゴムベルトでさらに固定する。現在ではこれが最も進歩した形態のものである。長靴は田植時の足腰の冷えや蛭又は外界からの刺激物等から身を守るために着用する。図9一(b)は指なしの田植用長靴である。図9一(a)は指つき田植用長靴の着用である。

(5) かぶりもの

1) 戦前のかぶりもの

① 手ぬぐいのかぶり方

図10に手ぬぐいのかぶり方を示す。手ぬぐいは作業の時必要で、夏は防暑、汗ふき、冬は防寒の役目をなし、またけがをした時などの臨時的の包帯の役目もする重宝なものである。その時、その時の状態に応じて腰に下げたり、首に巻いたり、頭にかぶったりする。かぶり方には種々あるが、



ひのき笠の着装 (男) ひのき笠の着装 (女) ひのき笠 菅笠

図11 笠類



(a)スキー帽 (b)麦わら帽子 (c)せんとう帽 (d)鳥打帽 (e)作業帽 (f)登山帽 (g)ヘルメット

図12 男子のかぶりもの (戦後～現代)

北設では男は(a)のねじりはちまきか(b)のほおかむり、女は(c)の姉さんかぶり、(d)のばばさかぶりという方法であり、かぶり方は昔も今もかわっていない。

② 笠

図11に戦前に使用された笠類を示す。北設で使用された代表的な笠にひのき笠、菅笠があるが、これらは組笠である。組笠は竹、桧、松、杉の削片などの扁平でやや硬質の資材を網代その他に組んで作る。その形態には円盤形、半円球形、円錐形の3型がある。杉、松、桧、一位などを材料とした組み笠を普通ひのき笠と呼び、おおむね円錐形に作られる。ひのき笠は日よけとして軽快である上に雨よけにも用いられた。笠は戦前戦後にかけて長く愛用され、高齢者には麦わら帽子より涼しいと現在でも愛用している人も多い。

2) 戦後のかぶりもの

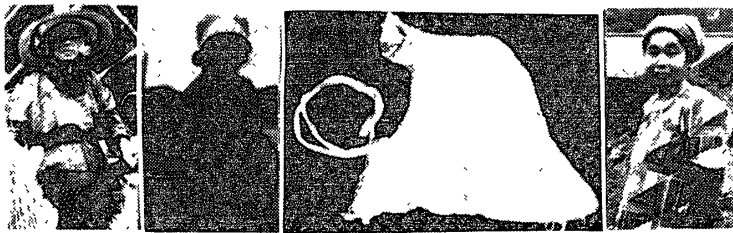
① 男子のかぶりもの

図12に戦後から現代までの男子のかぶりものを示す。戦後は作業帽として色々の形態の帽子が被られるようになった。スキー帽の様な形態のもの、麦わら帽子やせんとう帽、鳥打帽、登山帽、ヘルメット(山林作業用)などを手ぬぐいと組合わせて被ったり、それぞれの作

業の状態に合わせて着用している。

② 女のかぶりもの

図13に戦後の女のかぶりものを示す。戦後は写真(a)のように麦わら帽子や(b)にみられる布製の作業帽で日よけ用につばが大きく、また後首もすっぽりとおおわれて日よけとなっているものが多く使用されている。この作業帽はほとんど既製品で、ピンク、黄、ブルー系と色彩も多くみられるが、(c)のように山のみまわり用にタオル1本で手作りされているユニークな頭巾もみられた。また軽作業には(d)のようなスカーフの利用もみられる。



(a)麦わら帽子 (b)作業帽 (c) 手作りの作業帽 (タオル1本) (d)スカーフ

図13 女のかぶりもの



たすきと前かけ 割烹着・前かけ・エプロンの着装

図14 たすき・前かけ・エプロン

(6) たすき、前かけ、エプロン

図14に戦前から現代まで着用されたたすき、前かけ、エプロンの着装を示す。たすきは家居での仕事の時のたもと袖を1本のひもによって晴着や平常着を直ちに仕事着にかえてしまう機能性をもっている。前かけは仕事時の最もよごれやすい前身頃の帯から下の部分のよごれ防止と防寒、手ふき、ふろしきがわり等の昔から多目的に使用された重宝な補助衣である。昔から女の楽しみの一つとして布の裁ち残りをひもの色との組み合わせ等考えたり、家事用、仕事用、よそゆき用など考えながら夜なべ仕事に精を出した手づくりの一つであった。仕事着や日常着に長着の着用がみられなくなった現在では前かけの着用は次第に影をひそめ、かわって既製の割烹着やエプロンの着用が多くみられるようになった。

3. かこ

図15はかこの着用と製作過程を示す。かこは虫よけのことである。昔から虫よけには蚊とり線香がみられたが、養蚕の際に蚕に有害である為に(b)のようにぼろぎれをかたくより、一方の端にわらをつけて他方を点火していぶすのであるが、熱いので(c)のように生の葉っぱをまわりにかぶせて腰に下げ、下草かりとか養蚕の時に用いた経済的防虫駆除方法である。よもぎの草を使用すると香りが良いとの事であった。また一方図16のわら束を同じようにいぶして下げる方法もみられたが、これは“かだいまつ”とよばれている。このようにぼろぎれ1枚、わら1本でも、ものの命を大切に極限まで使いきろうとした農家の人々の生活の中から生みだした農民文化が今もこの様な形で名ごりをとどめている。これは近年都会での使いすての消費文明にならされた私達には反省させられる思いであった。最近では草かり時に(c)のような既製の携帯用器具付蚊取線香を腰にさげて下草かり等をしている姿が随所にみられる現状である。

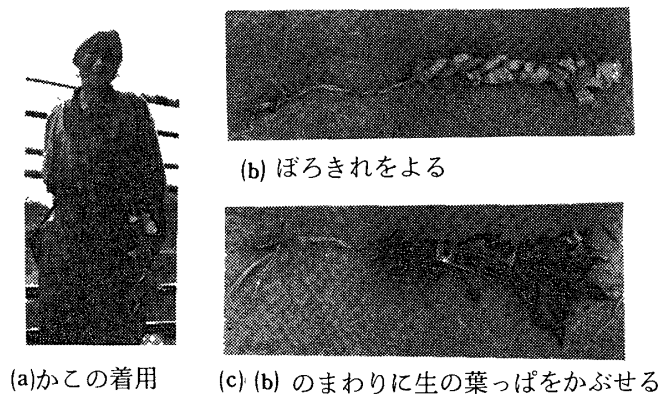


図15 かと（虫よけ）の着用と製作過程

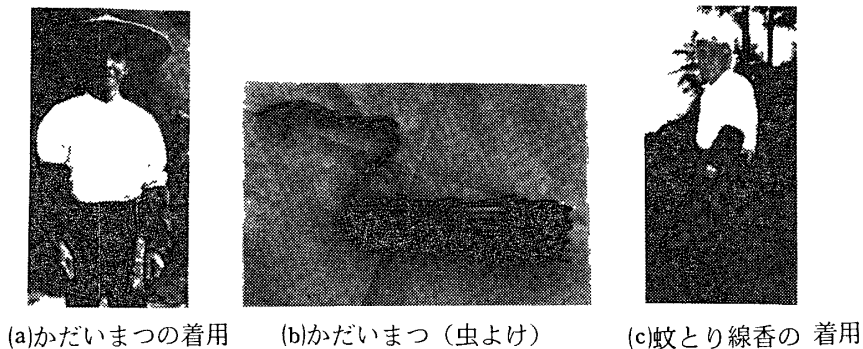


図16 虫よけ

要 約

1. 外被類は男女ともに戦前から戦後および現代にかけて大きく変化した。戦前は防雨、防雪用として大みの、しゅろみの、けらみの等重量のあるみのの着用からその後洋服形態の一部形式から二部形式へと変化し、素材は戦前の自家生産であるわら製品からゴムやビニール製品となり、現代ではナイロン等さらに軽い素材へと変化し、通気性、機能性共に合理化してきている。
2. かぶりものの中で手ぬぐいは男女とも昔から作業時には必ず携帯し、防暑、防寒、汗ふき、けが等の包帯代りに用いた。男はねじりはちまき、ほおかぶり、女は姉さんかぶりが多いのは昔も今も変わらない。また戦前、戦後にかけてかぶられた代表的な組笠にひのき笠、菅笠があるが、戦後は麦わら帽、せんとう帽、また布製の作業帽、ヘルメット等仕事の種類に応じてその着装方法も変化してきている。
3. 戦前のはきものはわらじ、わらぞうりから山仕事には甲かけ、津具足袋等の考案、昭和初期頃から地下足袋が使用され、現代に至っている。水田用には戦後ゴムの田植足袋、30年後半から水田用長靴が使用され今日に至っている。
4. はばきは女の場合戦前の一部形式の長着着用の際には着用したが、戦中戦後から現代にかけてもんぺやズボン等の二部形式になってからは着用しない。男では戦前の股引、乗馬ズボン形態では山仕事以外、はばきの着用はしない。現代での作業ズボンの際には足元の機能性やよごれ防止等の経済管理上より、はばき着用の機会が多い。

5. うでぬき, 手甲, 手袋は山林作業時に体の保護や衣服の汚れ, 破れを防止するためにつける。現代では作業に応じて軍手, ゴム手袋の着用がみられる。
6. 虫よけには戦前からの布製の“かこ”やわら製の“かだいまつ”が使用された。かこ等に見られる農民文化が今もなお名ごりをとどめて利用されているが, 最近では既製の携帯用蚊取線香の使用もこれにあわせて多くみられる現状である。

以上, 北設の仕事着の補助衣の推移については新らしい仕事着への受容姿勢は極めて緩慢ではあったが, 時代の流れと共に徐々に古くから伝承されてきた手製の補助衣は影をひそめ, 合成繊維を主体にその形態も目まぐるしく変転した大量生産の既製の補助衣へと年次的に進行しつつ現在に及んでいる傾向が何れの地域にもみられる現状である。

次第に消え去り忘れられていくであろうこれらの補助衣は農民の生活史でもあり, 生活文化の名残りともいえるのではなかろうか, そしてこれらの変遷を考究することは現代および将来の衣生活改善への基底を作るものと考えられるものである。

参 考 文 献

- 1) 服装文化協会編: 服装大百科事典, 上・下, 文化出版局(1981)
- 2) 宮本馨太郎: かぶりもの, きもの, はきもの, 48~175, 岩崎美術社(1968)
- 3) 高橋春子 他: 衣の民俗叢書, 1~130, 明玄書房(1979)
- 4) 古川智恵子 他: 名古屋女子大学紀要, 28, (第1報) 1~10 (1982)
- 5) 古川智恵子 他: 名古屋女子大学紀要, 28, (第2報) 11~20 (1982)